# こんなものを読んできた（37）

（漫画）たくま朋正・（原作）伊藤暖彦「航宙軍士官、冒険者になる」（電撃コミックス）

校長・鈴木　健

はるか未来、宇宙に広がった人類はバグスという異星生物と生き残りを賭け激しい戦争をしていました。人類銀河帝国軍の戦艦イーリス・コンラートはワープ航行中にバグスの奇襲を受けて大破、生き残ったのはアラン・コリント中尉一人だけでした。アランは生き延びるためにワープアウトした先にあった地球によく似た惑星に降下します。そこは魔物や魔法が存在する世界で、高度な文明を失い中世レベルに後退した人類の子孫が住んでいました。森の中をさまよっていたアランは、反乱で国を追われた王女クレリアを助け、一緒に旅をすることになります。アランはクレリアのために国を取り戻すことと、バグスがこの星にも襲来する可能性に備えこの星に科学文明を再建することを目指して動き出します…。

と、こういうお話ですが、はっきり言って、原作者はアメリカのＳＦ作家、デビット・ウェーバーの強い影響を受けていると思います。対話や妥協の不可能な異星生物、文明を失った世界を再文明化するというモチーフ、主人公のアランがナノマシンで強化された身体や現地の人には魔法としか思えない科学兵器で無双状態というところも、ウェーバーの「反逆者の月」や「セーフホールド」シリーズにそっくりです。

しかし、私はこれが悪いと言うのではありません。ＳＦ的な設定はしっかり守りながら、美少女たちや魔法や魔物などを登場させてラノベ的な味付けにして、今までＳＦなどあまり読んだことのない読者にも受け入れやすくしているのは、原作者の伊藤暖彦の功績だと思います。たくま朋正の漫画もメカはシャープさを、生物は躍動感を感じさせ、原作の世界観をよく表現しています。こういう作品が増えるとSF ファンのすそ野が広がるのではないかと思います。

そういうわけで私は、この作品をとても楽しみにしているのですが、実は先行きが不安です。なぜなら原作者の伊藤暖彦が小説の第４巻を出した後、行方が分からなくなっているからです。「行方不明って何？」と思うかもしれませんが、2020 年から WEB の連載が止まり、SNS も更新されず、出版社も何のコメントも出さないため、今どうしているのか、全くわからない状態だそうです。

ネット上には、このことをめぐって、スランプ説から死亡説までいろいろな噂が飛び交っています。確かに、この作品では設定が壮大なので、どうやって終わらせるのか作者自身で見通しがつかなくなって筆を投げた、という可能性もありそうです。しかし、漫画の方は今、９巻まで出ていて小説よりも話が進んでいます。原作者に無断でストーリーを進めてしまうというのは乱暴な話なので、もしかすると出版社と原作者は連絡が取れていて、ストーリーを相談できる状態なのかもしれません。この先に期待したいですね。